

〔南留別志〕一熊をしぐまといふは何もの、つけたる訓ならん、

〔本朝食鑑〕熊十一略○中

附録熊音碑、和名訓之久萬、此熊之大者、色黃白、頭長、脚高、猛惡多力、亦倍于熊、能拔木、轉巖、豺狼亦畏之、見人則立而攫、破之、凡熊不食人、齧或食之本邦希見之、世稱黃白熊者乎、

〔延喜式〕治部二十一祥瑞

赤熊神獸也 右上瑞○中

黃熊略○中 右中瑞

〔日本書紀〕二十六齊明四年、是歲越國守阿部引田臣比羅夫討肅慎、獻生熊二、熊皮七十枚、

〔日本後紀〕二十一嵯峨弘仁元年九月乙丑、公卿奏言、略○中 去大同二年八月十九日、下彈正臺例云、略○中 獨射

狂葦鹿、獺、熊皮等、一切禁斷者、略○中 伏望雜石及毛皮等悉聽用之、略○中 並許之、

〔延喜式〕四十一彈正凡熊皮障泥、聽五位以上著之、

〔東遊雜記〕三此日は十里の行程しかも遠道故に戸切知歸宿夜の四ツ頃にて、人々湯へ入り食事などする内に、八九ツにもなりなんとおもひし頃、村中大に騒動して、山も崩る、ときの聲をあげ、上を下へと大勢ませかへす、御巡見使始メ何事やらんとおもふ所へ、松前より付添ひし役人來り、例の熊馬を取に來りし故に、かく騒動仕る、是より鐵炮も數挺うたせ候ま、御驚下され間敷よしの案内あり、夫よりして明松星の如く、鐵炮ひまなく打し也、漸く八ツ比に静りし故に、聞ば熊二疋來り、馬を二ツ取歸りし也、御巡見に付ては、松前より來りし諸役案内者人足迄都合千四五百人、馬も百餘疋も集りて賑々敷中へはいかなる猛き惡虎なりとも、來るべきとはおもはざりしに、熊來りて馬を二疋も取りしと聞ば、何れも大に驚きし也、土人を呼出され尋有しに、熊は日本の熊に大概似たる形にて、月の輪なく、前足短く、後足長く、毛深く、黒しといへど、底に赤色を帶て、光りなく、日本の熊の色とは大に劣し也、顔は犬の子の如く、かはゆらしく見ゆ、急に走ら